
超能力者コナン

きのこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超能力者コナン

【NZコード】

N1320N

【作者名】

きのこ

【あらすじ】

ある日コナンは事故に遭い、心肺停止に陥った。息を吹き返し、意識を取り戻したコナンだったが、幸か不幸かアンサー・トーカーという能力を手に入れていた。その能力を使い、仲間と共に黒の組織破滅へと向かうコナンだったが…。

金色のガッシュから『アンサー・トーカー』とその設定しか出てきません。

プロローグ

「、ここは…。病院か。

朦朧とする意識の中、体中の激しい痛みで目が覚めた。
ゆっくりと目を開らぐ。

周りは暗かつたが、ここは病院の中だとすぐにわかった。
オレはそのとき、

『何故病院だとわかったか』

そんなこと気にもとめていなかった。

ただ、空氣やうつすらと見える周りのもので、病院の中だとわかつたのだろう。そう思っていた。

目を開ける前からわかつていたのに…。

少し考えた瞬間その答えが出てきていたのに…。

その時はまだ、自分の中に超能力という名の新たな『力』が目覚めたことに、気がついていなかつた…。

プロローグ（後書き）

初めてまして。さのじです。

初投稿の駄文ですが、続きを読むと嬉しいです！！
感想、評価、ダメだしななど、お願いします！！

始まりは雨の日 part1

「「めんね、コナン君。

」こんな天気の日に買い物手伝わせやつて。」

もうすぐ梅雨のせいか、今日は朝から凄い雨。

オレは蘭と一緒に近くのスーパーに買い物に行き、今はその帰り道。

「蘭姉ちゃんが謝る事じゃないよ。

僕が勝手について来ただけなんだから。」

「優しいのね。でも、コナン君が来てくれて助かっちゃった。

こんなに沢山買ってこいなんて、酷いもんよね。

そんなに必要なんだつたら、自分で買いに行けばいいのに。」

蘭が口調を強め、愚痴をこぼしている。

その相手は、言わずと知れた名探偵、いや、迷探偵の蘭の父、毛利小五郎だ。

オレが居候させてもらっているのは小五郎のおかげ。

蘭の意見はもつともだと思ったが、ただ、はははっただけ笑った。

オレと蘭が買い物に来た理由…

それは、おっちゃんの我が儘だった。

「おー、もう酒がねえじゃねえか。

つまりもうねえぞ。蘭、買ってこい。」

最近依頼が全く来ない上、おつちやんが大好きな沖野ヨー「が急に活動を休止したため、さらに酒に入り浸った生活が始まっていた。

蘭もおつちやんの体を心配してはいるが、ああ言い出したらまるで駄々つ子のようにこいつまでも言い続ける父親を見かねて、買いに行くことにしたのだ。

蘭が、ビールとおつまみ買つてくればいいのね」と言つて、探偵事務所を出よつとするが、

「ビールは箱で10個買つてこい。

んでつまみは買える分だけ買つてこい。」

勿論蘭は、はあ！？つとなるわけで…。おつちやんはおつちやんで何故かポアロに行くし…。

それに今日は13日の金曜日。怒つてゐる蘭を一人で行かせて何かあつたら大変だし、荷物をひとりで持つのも大変だうと思つて、オレも買い物を手伝つことにした。

りんご先生へ。おめでたす

時間があつたので投稿しました！

二二二

？」「おおへへ！」

次のと、その次の話で「始まりは雨の日」は終わります。
つなので中途半端なのはお許しください m(—_—) m

第一回 金玉良緣

? 「 もうすぐな町を数つんだよ」

6

始まりは雨の日 part2

オレと蘭は買い物を終え、今は帰る途中。
信号を待っている。

蘭の機嫌は買い物をしていろいろに直してくれたのだが…

「そうだ。今日の夕食はコナン君の好きなハンバーグよ！
せっかく買い物に行つたから、お肉とか買って来ちゃつた」

機嫌がよくなりすぎて、言われたものだけでさえ荷物が多いのに、
別の物まで買つたようだ。

半分は別に好きじゃねーかと思い、もう半分はよく買つなど呆れな
がら、

「本當？ ありがとう、蘭ねえちゃん」

と子どもの演技で答えた。

その時、信号が青に変わった。

信号を待っていたのは俺たちだけだったようだ。

周りに渡ろうとしている人はいない。

歩を引いた時、少しだけ雨が強くなつた気がした。

始まりは畠の田 part2 (後書き)

「んにちは～～～その」です

? 「もづく～」

今回、短いですよね。気にしないで頂けたら幸いです。

「もづく～～～も～す～く～～～！」

では、突然ですが前回から耳障り目障りな物体の紹介します。

? 「わーい！～！」

鈍感でただうるさいだけのこれは

? 「うるさ～～～」

友達のまゆげさんです！～！

まゆげ？ 「まゆげじゃない～怒るよ？」

「じつぞう」皿田。

本筋はまゆつてさんですがじつでもいこですよね～

まゆつて「良くない！」

感想、評価、ダメだしなどよろしくお願いします

まゆつて「次もよろしくね～」

始まりは雨の日 part3

「雨、強くなつたね。」

「やうね…、風もでてきたしね。少し急いで帰らつか
蘭はやうに走つと、早足になつた。

オレも蘭に追つていつと早足になりかけた。

その時、赤信号の方から、一台の車が走つて来ているのが見えた。
スピードはだいぶでている。

これだと蘭のいるあたりに……

蘭が引かれる……！

そう思つた瞬間、オレは走り出していく。

間に合つてくれ。

蘭、蘭、蘭、

「やーーんつ……」

ドンッ

オレは思いついた。蘭を突き飛ばした。

蘭はなんとか安全なところに行つたが、オレはその勢いで転び、車の田の前に来てしまつた。

「口ナソ君つ……」
蘭が呼ぶ声がある。

よかつた。蘭は無事だ。

でもオレは……。

「めん。 蘭。

ドンッ

わしきよつも大きな鋭い音がした。

それが聞こえたと思つたら、

田の前が真つ暗になつた。

始まりは雨の日 port 3 (後書き)

こんなにちはーーーきのーーーです

まゆつて「もずくです」

久しぶりの投稿です。待つていて下さった方、まゆつて「いるの？」

長らくお待たせいたしました！これから本題に入り始めます
でも、また長らくお待たせすることになりそうですが、そこそこ
よろしくです。

まゆつて「なんで？」

宿題が・・・・・・・・

まゆつて「See you again next time」

家に帰ると…

「ただいまって、和葉ちゃんに服部君…？」

私が家に着くと、和葉ちゃんと服部君が椅子に座っていた。

「！」の平次のアホがな、どうしてもコナン君に会いたいって叫つか
ら連れてきたん。

せやけど病院の名前聞いてなかつたから、聞けりつと思ひ、蘭ちゃん家來たんや。」

「やつこつひひひ。病院、だいじ？」

「ナン君のお見舞いか。」

でも服部君にしては遅かつたよね。

連絡したの、ちよつと一週間前だし。

「オレはすぐにでも来たかっただんやけど…

テスト前やから行くなつてオカソントこのアホがつる…」

「平次の成績心配して言つてんのになんや、その言つて方は…」

「オレはすぐやのつて、ナン君の！」と心配だつたからよ
たかつただけや…」

2人がいつもどおり、仲良く言い合いでいる。

いつもと変わらないわね。

一緒にいるだけで落ち込んでた気分が少し晴れた気がする。

「米花中央総合病院だけど…私もこれから行くから一緒に行く?」

「蘭ちゃんも行くん?アタシら行つたことないからたすかるわ」

「じゃあ、準備してくるからちょっと待つてつて」

階段を上がつて、自分の部屋に行つてから荷物を置く。

次に、コナン君の部屋に行つて、着替えなどをかばんに詰める。それだけのことなのに、なぜか手が震えている。

いつもそう。コナン君のことを少しでも考えると体が震えて胸が押しつぶされそうになる。

準備がやつとのことで整のうと、3人で米花中央総合病院に向かつた。

家に帰ると…（後書き）

お久しぶりです！！

ネーミングセンスがなくて文章を書く能力もなく、夏休みの宿題が終わつてないきのこです ついでにタイピングも遅い…。

コナン「…学校つていつかからだ？」

まゆつて「九月一日から」

ついでに今日は九月三日だよ！

コナン「夏休み終わつてんじゃ ねーか！」

提出期限に間に合えばいんだよ。自由研究だつて一昨日やつたし

コナン「それつて…」

ではまた次回ノシ

アンサー・トーカーの説明&雑談（前書き）

登場するのはコナンと哀ちゃんの2人です。

アンサー・トーカーの説明＆雑談

今回は雑談しながら「アンサー・トーカー」の説明をしたいと思います！
本編とは全く関係ないのでもどりどもいい人はスルーして下さい！

「こんな放置していやつと更新かと思つたら雑談とはな…。
ごめんなさい…。」

「てか一話分使う必要あんのかよ？」
必要はないけど…

「工藤君、この作者に理由なんて求めちゃだめよ。気分で動いてる
んだから。」

哀ちゃん…。当たつてるよ？当たつてるんだけどなんか酷くない？

「そんなことよつせりと説明しろよ。」

あ、はい。

じゃあ、コナン君、アンサー・トーカーとはどんな能力だと思います
か？

「そのまんま『答えを出す者』じゃねーの？」

大正解！！

「バカにしてんのかよ。」
「バカにしてるのよ。」

違つよー哀ちゃんまで何言つてんの…！

「それ以外考えられないじゃない。」

違うつて!!

「なら何なんだよ?」

ただ…、なんとなく…。

「工藤君、だから」

「わかつてたんだけビリまでは思わなかつたんだよ。」

2人とも酷い…。まあよくないけどいいや。先進むよ?

アンサー・トーカーは、その名のとおり『答えを出す者』という意味なのですが、答えが出ないものもあるのです。哀ちゃん、何か分かる?

「そんなこと知るわけないじゃない。」

だよね…。

たしか、原作では人の心情とかその考えに至つた過程とか涙の理由とかだつたはずだよ。あと、『解なし』もあつた!

「解なし?」

答えがないんだって。

たしかシン・クリア・セウノウス(技の名前)を倒しちゃいけないことは分かるんだけど、倒さなかつたら自分たちが消されるし…で、答えがなかつたんだよ(金色のガッシュ33巻)。まあ解なしつては表現してないけどね。

んで、その能力はもとから持つてたが、「一度死んで生き返つたら

何かあつた」のびっちょりでしか手に入れられないんだよ。

だからコナンが一回心臓止まつたってのは設定だけだから安心して「設定だけってなあ…。まあよかつたけど…。」

でも、一回死んでからのほうだと、何日かしたら面白~い夢を見て、脳がその能力を本当の危機にしか目覚めないよう隠しちゃうんだよね~。

「それで、どんな夢なのかしら?」

えっと…、サンビームさんが妖精になつて、ブラゴが笑いながらお手玉して、何人も魔物にアホ足りないからお仕置きされて、最後にえつちらオットセイするんだよ（金色のガッシュ29巻）。

「全然わからんねーんだけど。」

だから、哀ちゃんがすんごいフリフリのついたロリータ着て、いかにも当たり前な感じで出てきたり、他には…、まあ、とにかくそんな感じだよ。

「最初からそう言えよ。」

「そんなどえ使わないでもらえないかしら。」

怒つてますね…。

でも、哀ちゃん似合にそつだけどな。もどがかわいいし。

「何?殺されたいのかしら?」

苦しまない方法ならお願ひします。

「おーおー…」

「何[冗談]を真に受けているのよ。」

「えつ? [冗談]だつたの?」

「『『えつ』』じやねーよ。」

「何考えてるのよ…。」

「この先の話をどう進めよいかと…

「もういいわ…。」

?

それと、「夢を見て危機の時しか…」のあたりの設定は変えてる予定です。

長くなつましたが、説明はこのくらいです。

これからもよろしくです。ではノシ

「 いじが、コナン君の病室。」
そう言つと、毛利の姉ちゃんは『572』と書かれた部屋の前で足を止めた。

ガラガラガラッ

戸を開けると、中は意外に広かつた。

ベッドは一つだけやから個室。
そのベッドの上に工藤が寝てある。

「コナン君…、まだ起きてないみたいね…。
じゃあ私は、お医者さんと話してくるわね。」

「アタシも蘭ちゃんと一緒に行つてくるわ。」

「おう。わかつたわ。」

そう言つと2人はすぐに病室を出ていきおつた。

2人は工藤の見舞いに来たんとちやうんか?
まあええわ。

「あなたの言つた通りね。」

「へへへ、どうから歯が…？」

「だら？」

「あ、わいわいで寝とつたはずの工藤が田開ナドロ開けて…

話じとる…。」

「それ、立つちも。」

「あの歯はちつこ姉ちやん…？」

つい、ベッドの髷から抜けてしまつて…。」

？？？

「工藤、起きてたんか？それに、ちつこ姉ちやんも何で…？」

「あら、私がこちやいけないのかしら？」

「うつこつ意味じやのう…」

「オレが呼んだんだよ。聞きたことどがって。」

伏し田がちに聞ひ藤。

?

何や？聞きたことない。

つて、そういうふうに藤寝たふりしどうたんかー？寝たふりやのうて、意識戻つてへんふりか…。

オレは軽く頭を働かせる。

『オレが呼んだ』ちゅう「う」とは、とひへ伏田が覚めてたんか？毛利の姉ちゃんは藤が起きしゆこと知つてへんよひやつた…。てことは…。

状況が見えてきたけど、藤は何考えとんねん。そんなこと隠して何したいん。

こら聞いただす必要がありやうやのな。

「何考えてるん。教えろやー藤ーーー。」

この時オレは、二郎が病院の中ひきつけられたらと覚えた。

えつと…、大変お久しぶりです…！

「『大変お久しぶりです』じゃねーだろー。」
「ごめんなさい…。

「待たせすぎにも程があるわね。」
「ごめんなさい…。

「連載始めたからにはちゃんと更新していくことよ。」
「ごめんなさい…。

「待つてる間に、うな重何杯も食えるだー！」
「ごめんなさい…。

「待ちくたびれて、首が長ーくなっちゃつよー。」
「ごめんなさい…。

とりあえず、大変お待たせして申し訳御座いません。

「とか言いながら、言い訳は腐るほどあるんだが…？」
うん。一番得意なことは言い訳と口から出任せだからね

「使うところじゃないんじゃないの？」
はい。そのとおりで御座います。

できるだけ早く更新するようになりますので今後とも
よろしくお願い致します（――）

「教えるやー工藤ーー！」

そつ言う服部の口調が、少し強くなつた。
少しじゃねーかもな。
怒らせちまたか?
当たり前だよな…。

「何考えてるかだよな。それはさつきも言つたとおり灰原に聞きた
い」とがあつて…」

「んなこと聞きたいんぢゃうわ。毛利の姉ちゃんまでに隠して
理由を聞いとるんや！」

えつと…「…これつて言わなきゃダメなのか?

「何やねん、工藤ー早よ言えやーー！」

今度は怒鳴り気味で言う服部。
なんとか誤魔化せねえか…。

「色黒の探偵さん、工藤、どうだかわかつていいのかしら?」
灰原が肩をすくめ、いかにも飽きれているといった感じで服部に聞
く。

「工藤病院やつたんや。忘れとつたわ」

服部、それ絶対嘘だろ…。言い方が嘘っぽいぞ。

でも灰原、ナイス！」のまま話をそりせば…

「で、上藤、じいさんで呼よばれや。」

さつきよつも口調がずつと優しくなつた。
でも、もつぱうしかないのか…！？

「私もまだその理由は聞いてないわ。言いたくないんじゃないのか
しら？」

大体予想はつくナビ」

灰原：！？なんか今日やけに優しくねーか？

でも予想がつくって…

「優しいと思つたのはあなたの勘違い。

それに、上藤君の考えそうな事くらい、予想がつくわよ。
それくらいわかりやすいもの。あなたの考えることって。
イラッとするようなことをわらつと言つ。

本当に、優しいと思つたのはオレの勘違いだったようだ。

「で、その理由つて何や？」

じつとりした目でオレの「と見てくる。
服部、今日、お前、しつこすぎないか？

「えつと…それは…。」

「何や？」

……。

「ねえ、これって永遠ループにならうなんだけど、終わらせる気は無いのかしら？」

呆れたよつて、ため息混じりで言つてへる。
しかも、オレのことを軽く睨みながら。

「もうや！姉ちやんの予想言つてみてくれへんか？当たつてるかもしねへんで！」

予想なら…こいけど。

当たつたら嫌だけど…まあ当たんねーよな？

「いいわよ。

私が思うに、まだ覚悟ができるないんじやないのかしら？
愛しの彼女に会つ覚悟がね。」

……。

大体当たつてやがる…。

「わうなんか？」藤？

「…。」

「姉ちやんに会つのに何で覚悟なんかいるん？

心配かけたままにしてでもええんか？

ちやうよな。元気な姿早く見せてやつたほうがええに決まつともよな？」

服部…。

「蘭がオレを見たら、涙を流すと思つ。」

「言つてしまつた。

「蘭がオレを見たら、涙を流すと思つ。」

何度も見られているとは「え、こんな姿で『大丈夫、元気だよ』蘭姉ちゃん！」なんて言つたら…。

自分で言つのもなんだけどオレの姿は『大丈夫』な姿じゃないと思つ。

体中包帯だらけ、点滴もしていて、今は外してるけど呼吸器まであり、見て『大丈夫』だと思う奴はあまりいないと思つ。

もし蘭がこんな姿でそんな事を言つたら…

オレだつたら、きつと…。

それにきつと…あの蘭だから…。

「もうへ、見たくねーんだ。蘭の涙を。」

わかつてゐるからこそいるんだよ。その覚悟が。

他人の事でも自分の事のようだ、背負い込んでしまう、あの優しい性格だとな。

だから、そんな優しくやつて会つのつて、ためらつちまつていつか…。

「ナンとして、蘭が工藤新一のことが好きだつて何回か聞いたこと

がある。

本人の口からも、何回か。
蘭がそんな風に思つてくれているらし
い。だから、きつとまた見ることになる。

オレのせいで何度も流させている、あの涙をな。
だから…

「オレが悪かつたわ。もうノロケは止め。
もうええからちつこい姉ちゃんに早よ、何聞くんだか知らへんけ
ど聞いて、答え教えてもらえや。」

さつきの灰原と同じように、呆れた口調で言つ服部。
オレが悪かつたからノロケは止めるつて…。
ノロケなんかじゃねーし、呆れられたのか？オレ。

「呆れられたのよ
グサツとくることをわざと言つなよ。

んにしても、灰原の言葉つて結構容赦ねーよな。
どうつて感じがブンブンするつていうか…。
まあそんなのいつものことか。

「さつき聞く」とは聞いたよな？じゃあ、あの話の続き頼むぜ？灰
原

「ええ」

「んにちはー

今回やけに（無駄に？）長いですね…。

えっと…、まず始めに訂正です。

あらすじのところで、ガッシュのキャラは出さないことを書いたのですが、次回、出て来ます。

回想のシーンになつて、哀ちゃんがアメリカに留学してたところの話で。

そこを訂正です。

それと、新人戦が6日から8日までの3日間があるので、そのうちのどれか1日以上、更新します！

「きのこにしては珍しいじゃない。そんなに早く更新するなんて。」

おおー本編に出てくるか未定の園子！！

うん、もうちよいでテスト2週間前になつてまた更新できなそだからね。

「ちょっとー出でくるか未定ついでにこいつよ（怒）」

ではまた次回ノシ

「あれは私が9歳の時…まだアメリカに留学していた時の「」と…。」

ミ ミ ミ ミ

アメリカの小さな田舎町

「おい、「」の辺に宿はあるか?」

1人の青年が話しかけてきた。

髪の毛は重力に逆らつて立つていて、漫画でよくあるよつた見事な銀髪。

この前会つたジンとは違く、少し明るい感じの色。

「「」の辺に宿のよつなと「」りは一軒もないわ。

あなた、旅の人?」

「ああ、やうだ。」

旅の人…。なら…

「旅の話をしてくれるのなら、家に泊めててもいいわよ。」

旅の人なら、全然覚えて無いけど、私の生まれた国、日本の事も知つてゐかもしけないし、

お父さんやお母さん、お姉ちゃんの事も知つてるかもしけない。

この前ジンに聞いても、何も教えてくれなかつたから…。

「 ならそれで頼む。」

表情も口調も全く変えないで言つてくれる。

ジン程じゃないけど冷たい顔をしてる…。でも、なんだかジンに似た感じの人。

似てるだけだろ? うん。

「 家に案内したいところなんだけど、これから買い物なの。地図を書くから、後で来て。」

そう言つて、紙とペンを取りだそうとするとい、

「 いや、その必要はない。

3時間後、お前の家に行く。」

と言い、私に背を向けた。

「 私の家、わかるの?」

「 人の家くらい、普通すぐ見つかるだろ? 」

当たり前のよつこ、そして少しバカにしながら言つた。

普通ならイラッとする事だけど、今、私の中は『?』でいっぱいになっている。

すぐ見つかるものなの? って。

しかも、3時間後くらいに来てと書いたり思っていたら、私の考えを読んだかのように3時間後に行くつて言われたし。
こつちはたまたま…よね？

でも、わかるつて言つてるんだから地図書いたり、場所教えたりしなくていいのよね…？

「じゃあ、あなたの名前は？
私は富野志保よ。」

「オレはデュフォーだ。」

「そ、う…。ありがと。」

そう言つと、デュフォーは今度こそ私に背を向け、すぐここかへ行つてしまつた。

私に残つた謎は2つ。

1つ目はここから10分くらいの所にある私の家をどうやって見つけるのか。

2つ目はあんなふつきらぼつて愛想の全くない人が旅の話を聞かせてくれるのか。
ということ。

その事をずっと考えながら、私はスーパーへと向かつた。

早速ガツシュキャラが出てきました！その名は「ユフロー」…哀しい過去の持ち主なのです。

コナシー 哀しい過去?」

気になる方は金色のガッシュユーティリティ24巻を!!

元太「『おもひで』って何だよ?『おもいで』じゃねーのかよ?」

哀れむせいでは『おせひて』と思ひてゐる

光彦「さあ？」

それと、今日から2周間ほど之間、更新できなーのです。

歩美 - どうして?』

今回のテストは真面目にやがて…ま(ーー)まではまた次回ノシ

おもひで part2 (前書き)

大変お待たせしましたm(ーー)m
留学しているとはいえ組織の監視がそんなにあまいのか、そこはス
ルーでお願いします。

「じゃあ、日本にも行ったことがあるのね！」

あの後 あれからちょうど3時間後、デュフォーは私の家に来た。

そして、2人で夕食を食べた後、以外にもすぐ旅の話を始めた。

テレビのニュースが、BGMになつていて。

デュフォーはまず、日本のことから話し始めた。

私が日本人だからか、そこから話してくれた。

「ああ。一度だけな……。」

「1人で行ったの？それとも、誰かと一緒に？」

「古い友人と行った。」

そう話すデュフォーはあまり顔に感情を出さないものの、

悲しげで、どこか遠くを見ているようだつた。

志保は、聞いてはいけないと聞いてしまつたと思い、とつさに話を変えようとした。

「じ、じゅあ、観光は？どこに行つたの？」

「観光はしていない。モチノキ中学校からモチノキ空港に行つたらいいだ。」

え？モチノキ？

いつだつたか、ニュースで聞いたような気がする。

確かに、謎の巨人が現れて、光の竜と共に消えていつた場所…。
気になつて何度も調べてみたけど、その実体は明らかになつていな
いらし…。

「もしかして、行つたのつて今年の春？」

気になつたから聞いてしまつた。

でも、もう一人の私は聞くなつていつていた。関係ない世界だからつて。

突き離すような言い方。

「そうだ。だがもうすんだ話だ。お前には関係ない」

関係ない もう1人の私が言つたとおり、私には関係のない世界…。

それを『ユーフォー』は知つてゐるんだ…。

聞いたやだめなのかな?

そうは思つても、聞かずにはいられなかつた。

「お願い！私、あの時のこと知りたいの！いくら調べてもわからなくて…。

あなたは知つてゐるんでしょう？お願い、教えて！」

思い切つて聞いてみた。

すると、

「なぜだ？」

と逆に聞き返された。

？

「お前、頭が悪いな。なぜ知りたかと聞いてゐるんだ。」

イラッとしたけど、理由を言えれば教えてもらひえるのかも知れない。

苛立つ気持ちを抑え、出来るだけ冷静に、平然と答えた。

「光の竜も巨人も、どこからか急に現れ、姿を消した…。あれはCGかもしないといつ説もあるけど、

そうじゃなかつたら本物 異世界の生き物なのかもって思えて…。

でも、そんなことあるはずなについて 信じられなくて…。私、謎を謎のままにほしておきたくなこのー」

冷静に言つてゐるつもりでも、今を逃したらもうチャンスは無いと思つと感情的になつてしまつ。

ちゃんと理由を説明できているか不安になる。

1分くらいたつてから、デュフォーは口を開いた。

「異世界の生き物は信じられない、そう言つたな。」

無表情のまま言つたデュフォー。面葉にも感情が入つていない。

「…ええ」

私は考えながら頷いた。

「でも、世界は他にもあるって、信じたい気持ちもあるの。」

デュフォーは私の表情をじつと見てゐる。

そんなに表情のない田で見られると、言つてはいけないことを言つてしまつた氣になる。

でも、そんなことは無かった。

私から視線をふと反らすと、デュフォーは口を開いた。

「誰にも言わなこと誓えるなら、話してもいい。」

この時のデュフォーの田は、さつきまでとは違い、懐かしげで寂しげで、少しだけ優しい色をしていた。

おもひで part2 (後書き)

お久しぶりです……。

とっくに2週間過ぎますね……。大変お待たせいたしましたm(—

ー) m

「毎度毎度待たせ過ぎだろ」

はい……。分かつてはいるのですが……。

今日中にもう1話投稿する予定なのでお許しください。

でも、『予定は未定、決定に非ず』という言葉を覚えておいて下さい。

ねむひだ サルサ (繪書)

原作とは違い、袁ちゃんは組織に両親のことを聞いていない設定です。

あと、デコフローはデコフローじゃないのでオリキャラ(?)とも思つておいてください。

デュフォローはあれから、色々と話してくれた。

決して私と目を合わせることは無く、どこか遠くを見つめながら。

『デュフォローの話してくれたことは、現実のこととは思えない内容だった。

・この世界とは別に、『魔界』があるということ。

・この『人間界』で1000年に一度、魔界の王を決めるために100人の『魔物の子』が送られてきて、パートナーの人間と共に闘うこと。

・魔物の子は『魔本』とともに送られてきて、魔本が燃えると王の資格が失われ、

最後まで残った者が魔界の王になること。

・デュフォローはそのパートナーの1人だったということ。

・さつき語っていた古い友達とは、その魔物のことだということ。

そして、

・あの巨人はファウードと呼ばれている魔物だといついた。

・デュフォーはそのファウードの中じたといついた。

・光の竜は、ある魔物が出した技だといついた。

話し終えたデュフォーは「信じるか?」と聞くよつて、私を見た。

私は迷つことなく、すぐにに頷いた。

デュフォーの話してくれたことば、現実のこととは思えない内容だった。

それは嘘じやない。

でも、私は何故だかすぐに信じることができた。

彼の目が、嘘をついていると思わせなかつたのも、理由の一つだと思つ。

「あつがとつ、話してくれて」

私がそつとつと、デュフォーはわっぽを向き、

「別に…。礼を言われるよつな」とはじて「なー」とつぶやいた。

この時も無表情だった。

少しの間、沈黙する。

「ユースキャスターの声だけが聞こえる。

その他は何の音もせず、それだけが静かに響いている。

この沈黙を破ったのは、私だった。

「私の両親や姉に、会つたこと無いわよね…？」

父は宮野厚司、母はエレーナ、姉は明美って言つただけど…」

会つているわけがないと思いながら、わずかな可能性に賭けて聞いてみる。

私の質問に、デュフォーは私の目を見て、やはり無表情のまま答える。

「残念ながら、会つたことは無い。」

「やつ…。」

『残念ながら』は全然残念そうに聞こえなかつた。

でも、私にひとつはとても残念なことで、その気持ちを抑えきれず、俯いた。

そんな私をデュフォーは見ていたが、

「今、どうしているかを知りたいのなら、教えてやれないこともないが。」
と急に言った。

勿論、その言葉に感情は入っていない。

私はその言葉を理解するのに、少し時間がかかった。

「会っていないのに、知っているの？」

デュフォーは静かに首を横に振る。

「じゃあ何故……？」

少し迷った表情になり、私の顔を見て、また目を反らしてから口を開く。

「オレにはある能力がある。アンサー・トーカーという、能力が。
その能力でほぼすべてのことが分かるんだが……。信じられる奴なんて、いないだろ？」

また、目が寂しげな色になる。

「……」
私は思い出した。

デュフォーは時間じおりて、地図も何もなく私の家に着いたことを。

デュフォーは私の両親と姉のことを知らない。でも、分かるんだ。

「私は、信じるわ」

そのことを思い出した瞬間、私の口は勝手に動いていた。

「だから、あなたの分かる」とを教えてほしいの」

後で後悔することを知らずに。

デュフォーは、信じたくないことは信じないで欲しいと前置きして、話し始めた。

その話は、お姉ちゃんは日本の学校で組織の監視付きだけど普通に暮らしているということ以外、

信じたくないものだつた。

思つてもみなかつたことを平然と言われてから、聞いたことを後悔した。

そして、私はデュフォーに言われたとおり、信じないことにした。

ちょうどその話が終つたとき、ニュースキャスターの人があ

「A bulletin!! 『速報です!!』」
と言い、

画面がフランスの、隕石の落ちた後みたいな所の映像に切り替わった。

デュフォーはその画面にしき付けになつてゐる。

画面から田を離したかと思つと、

「日本に行く」

と弦き、帰り支度を数秒で済ませ、礼も言わずに出て言つた。

我が家のはビングで、ニュース終了を告げる音楽だけが、哀しく響いていた。

ミ ミ ミ ミ

おもひで part 3 (後書き)

「んばんは一書を終えました
「そういえば、あの鬱陶しいの、最近見てねーな…」
「そんなのもいたわね。」
あの鬱陶しいのなら鬱陶しいから退場してもうつたよ
「そう。いないとここまで違うものなのね。」
「だいぶ静かだよな!」
ではまた次回ノシ ミ

意外な一面

「よーするにオマーは、オレがその…アンサートーカーだけになつたつて言いたいんだな？」

灰原はそれを言いにわざわざ来ててくれた事はわかるけど、超能力の存在を灰原が本氣で信じているなんて、意外にも程がある。

答えはわかりきっているが、確認の意味も込めて、聞いてみた。

「ええ

やつぱり…なんだな…。

そう答えた灰原を見て、服部が意外そうな顔をした。

「姉ちゃんがそんな非科学的のこと信じるなんて珍しいやないか

灰原は、少し表情を曇らせ、肩をすくめる。

「あそこまでやられけや、信じざるを得ないじやない。

彼の言つていたこととは、後で確認をとつたら本当のことだつたし

…。

『彼の言つていたこと』は灰原の両親の死の事で、確認をとつた相

手は、組織の誰かだろう。

でもそんなあつさり確認をとれる人なんて組織の中にいるのか…？

そんな事を考えていると、灰原はさつと表情を変え、荷物を持った。

「じゃあ私、帰るわね。用は済んだから。

彼女、まだ来ないわよね？」

「…ああ」

「それじゃ。お大事に」

心にも無いことを言つて、さつと病室を出していく灰原。

その後ろ姿を見て、ドアを閉めながら服部が呟いた。

「ホンマに信じるんやな…」

「…そうみたいだな」

灰原はアンサー・トーカーという超能力の存在を信じ、更にはオレがそんな奇妙な能力を持つてしまったという事も信じて疑わない。

こんな非現実的な事を本気で信じている灰原を、服部も意外に思つてゐるようだった。

しばらく沈黙が続いた。

そして、不意に病室のドアが、勢いよく開いた。

そこに立っているのは、オレが今一番会いたくて、一番会いたくな
い奴。

意外な一面（後書き）

「こんにちは

約3週間ぶりの更新ですね。お待たせしました。

「やつと私の出番が来るのね」

あ、はい。蘭も待つてたんだね。お待たせしました。

「てか灰原の出番今んとこ一番多くねえか？」

それは気のせいだよ

これからまた少なくとも3週間ほど間は更新できません。
またテストの時期が来てしまい…。

しかも合唱コンクールとかいう行事があるせいで練習とかいつも
もあり…。

この時期を過ぎてもなかなか更新出来ないと思いますが、
これからもお願いしますm(—_—)m

感想、評価、駄目だしなど、お待ちしています！

あと、題名をこう変えたほうがいいとか、そういう意見も待つてま
す！！

バレた！？

蘭と医者が来てから、色々あつた。

予想通りの事も起きたし、医者には記憶障害がないかの検査（単純な計算とか、自分の名前、年齢、家族、両親の名前とかを聞かれただぐらいだけどな）をされた。

小学1年生なのに、事故の時頭を強く打ちつけたことが意識不明にまでなつた原因とも聞かされた。

そして、意識が戻った今、もう何の心配もいらないらしく、オレの周りを取り巻いていた医療機器の数々は無くなつた。

にしても、両親の名前を聞かれた時はマジで焦つた。

母親の方は江戸川文代って事になつてゐるけど、父親の方はまだ決まつて無かつたからな…。

そこで蘭が

「コナン君の両親、外国に行つていて、コナン君は家で預かつてゐるんです。

それで、あまり家族のこと話すの好きじゃないみたいで…つて言つてくれなかつたら、面倒なことになつていた。

今はあれから3時間が経ち、日が暮れてきた。

服部はまだ居たかったようだが、明田学校だからと和葉ちゃんに連れられて帰つて行つた。

この病室に居るのは、蘭とオレの2人。

蘭は、さつさからずつと窓の外を見つめている。

すると、サッとカーテンを閉め、こいつを向いた。

「コナン君…」

「なあに？ 蘭姉ちゃん？」

蘭はじつとオレの顔を見つめている。

いつになく真剣な顔…。

この顔は確かに前に…。

そうだ、正体がバレそうになつて、問い合わせられるときは決まつて…

「コナン君は新一よね？」

やつぱりな…。

「違うよ。僕が新一兄ちゃんなんわけないじゃない」

このセリフ何度も言つたことか…。

「私ね…悪いと思つたんだけど、コナン君のケータイ見ちゃつたの。2つ同じものがあつたから、どちらか間違えて持つて来たものかもつて思つて」

！？

「でも違つた。

片方はコナン君、あなたの物だつた。もう片方は新一の。何で新一のケータイをコナン君が持つてゐるか コナン君が新一だからよね？」

…。

「メールとか、着信履歴とかも、悪いと思つたけど見つけやつたから、間違い無いはずよ」

マジかよ…

「何か言つなせよー新一ーーー」

ヤベ…。

「こひよぢつて隠魔化せば…？」

…あ、なる程。隠す必要はもつ無いのか。

「ああ。やうだよ。江戸川コナンは藤新一だ。今まで内緒にしてて、『めんな…』」

バレた!-? (後書き)

「」

お久しぶりです、その「」ですか!-!

もう3週間は過ぎましたね…。お待たせしました!

「」

「間があき過ぎなのもやつだね、何なんだよー」の展開!-

「」

「」

「」

「なんで今まで隠してたの…? 新ー」

「」

「何でオレがいなくなつてからそんなことしたんやー?」

「」

「」

色々と次回説明しますのでへへ

次回もよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1320n/>

超能力者コナン

2011年3月25日18時43分発行